# 外からの視点に日本人が今学ぶべきこと

## アレックス・カー　東洋文化研究者、作家

Alex Kerr

聞き手
池永 寛明　大阪ガス㈱ エネルギー・文化研究所長
Ikenaga Hiroaki

Special Feature
Reframing Japan from the Outside
Part 1

［総論］

訪日観光客の急増が叫ばれる現在よりもずっと以前から、実に多くの外国人が日本を訪れており、彼らに触発され、その文化を取り入れることで、日本文化もまた発展をしてきた。日本に40年以上在住し日本文化を研究しながら古民家再生に尽力するアレックス・カー氏は、母国アメリカだけでなくヨーロッパやアジア諸国のまちづくりや文化にも造詣が深い。カー氏ならではの幅広い外の視点から我々日本人が「今学ぶべきこと」について考える。

撮影／須田 俊哉



## 美しき良き日本 ――幼き日に見た「家」への想い

**池永**　アレックス・カーさんは徳島・祖谷（いや）での古民家再生プロジェクトをはじめ、景観保存活動や講演、あるいは文化的なイベントのプロデュースなど幅広く活躍されています。『美しき日本の残像』『犬と鬼』などのご著書には、幅広い日本の文化的な知識や社会背景、それに根ざした深い提言などが書かれていて、改めて私たち日本人が気づかされた点が少なくないように思います。

現在、日本に興味をもってくださる外国の方々は多いのですが、「クールジャパン」のようなある種限られたイメージで捉えている方もいれば、もう少し本質的なところまで理解しようとする方もいて、二極化の現象がみられるような気がしています。今日は、カーさんご自身の体験を通して感じられている、過去・現在・未来の日本のあり方などについてご意見やご提案などを伺います。

まず、最初に古民家再生をされた徳島・祖谷に至るまでの道のりを伺えますでしょうか。

**カー**　私は1964年、ちょうど東京オリンピックの年に、父親の仕事の都合で来日しました。12歳のときですが、横浜にあったアメリカ海軍の基地に住むようになります。そのとき大変印象に残ったのが「家」だったのです。日本の夫人たちとの交友会のようなものに母が参加しており、毎月誰かの家を訪れるのですが、一緒に連れて行ってもらっていました。当時、三浦半島の三崎には、ある外国人がつくった別荘街みたいなものもあったんですが、日本の古民家の中を50年代に本国アメリカで流行ったランチハウススタイルに改造していて、そのウッディな雰囲気がとても気持ち良かった。決して贅沢ではないけれど、トイレなどの設備をきちんと調えて居心地のいい空間にしてありました。

ですから、すでにその時代から外国人が古民家を新しくリノベートするという発想はあったわけです。

**池永**　その後は、本国と行き来されながら、1971年に祖谷と出会われたようですが、廃屋となっていた古民家をご自身の手で篪庵（ちいおり）という形にまで完成させようと思われたのは、やはりその子どもの頃の体験があったからなんでしょうか。

**カー**　そうですね。当時は学生でお金もなく、すべてハンドメイドでリノベーションを始めたんです。腐った部分を直し、茅葺き屋根を葺き替え、トイレをつくり、照明を入れて……さっと手を入れて終わりというのではなく、40年以上ずっと続けていたんですね。ようやく完成したのは3年前です。

**池永**　日本の１９８０年代はバブル経済で、古いものをどんどん壊し、新しい建物を次々と建てていた時代です。

**カー**　今もそうですけどね。古民家の取り壊しは、バブルのときより今のほうがはるかに多い。

　１９７０年代は、まだ「美しき良き日本」がぎりぎり残っていた時代で、そのなかで祖谷を見つけました。80年代から変わるスピードが速まり、90年代は急ピッチで、２０００年代になってさらに加速してしまいました。

## 偏った日本論 ――「世界一」に囚われた日本人

**池永**　祖谷を探す以前にはイェール大学で日本学を学ばれ、『『甘え』の構造』などたくさんの日本論を読まれたそうですが、その後の日本での実体験との違いのようなものを感じたことはありましたか。

**カー**　あの頃の日本論は日本の学者が一種のプロパガンダとして書いているものが多くて、日本の優越性を訴えるようなものが流行っていました。ですが、私はそれにはちょっと納得できませんでした。

　当時、中国美術の専門家で伝説的なアートディーラーだったデイヴィド・キッドという人に日本のことを含めていろいろなことを教わったのですが、「あんな単純な日本人論は大外れだ」と。中国文化があっての日本、東南アジアがあっての日本、韓国があっての日本。もっとアジアを取り入れなければいけないという思いがありましたから、その頃の日本論に対しては、違和感ばかりでしたね。

**池永**　ご著書にも、その論調を日本人自身が受け入れがちだというようなことも書かれていますね。

**カー**　「日本は世界一」のような評価に囚われてしまって、本当はどこがいいのかが見えなくなるんですね。皆さんが凄いと思っていない部分が本当は素晴らしいということがあるんですよ。

**池永**　具体的にはどのようなことでしょうか。

**カー**　9月に京都についての本（『もうひとつの京都』）を出したばかりなんですが、そのなかで、大江健三郎の『あいまいな日本の私』について触れました。大江さんの本には日本人があいまいだということがたっぷり書かれていますが、それは逆なんですね。たとえば京都のお寺や家のつくりはピシッと線をひいているようなところがあります。門の外と中は別で、次の間はまた別のランクづけのようなものがされている。きちんと線をひくということが日本文化の根源にはあり、そこから美しい、面白いことが生まれるわけですね。あいまいとは全然違うものがあり、その違うものに芸術性があるといえるでしょう。

Ikenaga Hiroaki

特に茶の湯は、「序破急」というリズムを決めて、そのなかに独自の世界をつくりますが、これは世界のどこでもできなかったことです。

## 古民家再生 ――「学芸員的発想」を超えて

**池永**　確かにあいまいばかりではありませんね。ところで、篠庵もですが、古民家は内部の修理が必要だとしても、建物のつくり自体はそのまま使える状態であることが多いのですよね。

**カー**　そうなんです。日本の古い家屋は壁らしい壁がない。全部が建具で、障子などで空間を変化させたりできる。それも凄い知恵ですが、木造建築ならではのつくりだと思います。それから大黒柱はできるだけ動かさない。柱は部屋の真ん中にそのままぼんとあっても綺麗なんですね。味がある。ですから、古い家の基本的な空間感覚や、構造や木材などの材質はできるだけ大事にしたいし、尊重したい。古民家の魅力はそういうものにあると思いますから。一方で、快適さやプライバシーの問題、あるいは耐震や建築基準法などいろいろあるので、どこまで変えるべきかは毎回熱い議論になります。

　そもそも昔のままの民家を再生するだけでは、現代の私たちが生活するうえで無理があります。たとえば世界の常識としてあるのが、古い家の直しを今の時代に引き上げるということ。残念ながら今の日本は資料館として直すというレベルで留まっていて、江戸がこうだった、明治がこうだったというような学芸員的な発想しかないんです。だからコンセントひとつ変えられないとか、昔の窓がこうだったから変えられないとか言う。でも、ヨーロッパは家を大事にしながら、完全に今の設備に転換させます。これが私の仕事の背景にありますね。

**池永**　学芸員的発想で保存して昔のままで残そうとするところが多いなかで、カーさんはアップデートする形で再生させる。

**カー**　昔の家に生活しながら今の生活にあった快適な空間にできるということが知られていない。それでつい壊してしまうんですね。本当にもったいないです。

**池永**　古民家には床暖房やペアガラスまで調えられているそうですね。

**カー**　最新の技術も取り入れた家なんですね。古い家イコールテクノロジーがない、原始的で自然にかえるということではありません。

**池永**　大阪ガスでは、22年前に「ＮＥＸＴ21」という実験住宅を建てたのですが、最先端の建物に江戸時代の住まい方の考え方を取り込んでいます。逆に新しいものに古い昔の知恵を入れるという発想はいかがお考えですか。

**カー**　確かに江戸の知恵というのはあるんです。そういうものを捨てるのではなく上手く取り入れながら、最先端の技術も取り入れて、今の時代に生きている家にもっていきたいですよね。

篠　庵
ちいおり

カー氏が徳島・祖谷の
古民家をリノベートした篠庵。

## 時代遅れの日本の都市計画 ――大切な自国へのプライド

Alex Kerr

**池永**　カーさんのオフィスには自治体からたくさんのオファーがくると思いますが、カーさんは今の地方をどのようにご覧になっているのでしょうか。

**カー**　だいたいどこの地方へ行っても駄目ですね。皆さんが考えている以上の危機的な状況です。どんどん人が減り家も空き家になり、悲惨です。特に周りの自然を粗末に扱ったり、古い町をつぶしたりしたところは、もう手がつけられない。ですが、まだ綺麗な自然が残っていたり、空き家でも昔の家が残ったりしていれば、望みがあります。今は観光の時代なので、それが最後の救いの手になるんですね。たとえ僻地でも、きちっと受け皿をつくると人が来てくれる時代になったので、それに気づいた行政や政治家が相談に訪れます。私たちのほうからプレゼンしたことはありません。

**池永**　そうなんですね。

**カー**　結局、外部の人間が言っても駄目なんです。地元の思いがあってこそで、そういう、本当にやりたいという思いのないところで成功したケースを見たことはありません。

**池永**　地方創生の目的で国からの補助金を入れても難しいでしょうか。

**カー**　お金があっても、どのようにすればいいのかというイメージがないですからね。

**池永**　自分たちの町や地域の真の良さ・強みがわかっていないのでしょうね。

**カー**　そう、プライドがない。それが一番のネックで、自分たちの町を素晴らしいと思っていないのです。壊して新しい建物をつくれば、それが現代的でいいと思う人が、残念ながらいまだに多い。

**池永**　古いものをすぐに壊して新しいものにしてしまう。日本がこうなってしまったのはなぜだと思われますか。

**カー**　そもそも、ビルを建てるとか、道路を通すというのは発展途上国的な発想なんですね。それはどの国にもあった。アメリカもそうなんです。たとえばニューヨークの有名なペン・ステーションの駅舎。もう泣きたいくらい美しかったのに、60年代に壊してしまって、殺風景なつまらないビルにしちゃったんですね。さらに70年代にグランドセントラル駅も壊そうという話になりますが、猛烈な反対運動が起こり、それ以降は歴史的に価値のある建物は壊してはいけないという共通認識が生まれたんです。

つまり、「車が欲しい」「冷蔵庫が欲しい」というような時代がどこの国でもあるけれど、ある程度社会が豊かになると卒業しちゃうものなんですね。そこで「昔の良さや自然はやっぱり大事だ」「新しいものをつくりながら古いものと調和させよう」という思いに切り替えができるようになる。ところが先進国のなかで唯一それができなかったのが日本です。卒業せずに留年のままみたいなことで、そこが問題なんです。経済が進んだ国で、これほど勝手に古い町や自然を壊しているのは珍しい。世界の動きから完全に逸脱しています。

**池永**　日本の都市計画は海外に比べてどうでしょうか。

**カー**　古臭い。私からみれば、時代遅れです。

**池永**　カーさんは、日本の都市は競争相手を想定していないとも言われていますね。都市・地方として国内だけでなく世界が競争相手のはずなのに、ベンチマークする相手を間違っていると。

**カー**　東京から祖谷に行こうとすれば、お金や時間の面では、バリでも、バンコクでも行けるんです。ですから、そういうところが競争相手だと思っています。

**池永**　まったく同感です。私ども大阪ガスの供給エリアである近畿には、文化コンテンツはものすごく多い。ところが、行政のトップに「どの都市が競争相手だと思って都市経営されていますか?」と伺っても、これまでそういうマーケティングはされていなかった。

**カー**　確かに近畿の文化財は凄いですね。

**池永**　たとえば奈良は、中国語でナーリャン（nai liang）と呼ばれますが、「すべてが良いところ」という意味もあるそうで、もっと評価されていいと思います。

**カー**　奈良は、「大仏商法」という言葉があったぐらいですから、より魅力的にしようという思いは近畿のなかで一番薄かったかもしれないですね。

京都はずっと駄目だったけれど、最近は景観に力を入れるようになり、2年前に屋上看板を全部撤去しました。看板をなくすと経済に悪影響を及ぼすと心配する声もありましたが、実際のところ、撤去後に影響があったかといえば、ゼロですね。かえって街の環境、美観においてはメリットになった。

**池永**　大阪も、近代建築物を「生きた建築ミュージアム」だと捉える動きが出てきたりと、新しいものと古いものが混じり合うまちのリノベーションが動き始めています。

**カー**　大阪はもっと売り出せばいいといつも思っています。私は通天閣のある新世界のあたりが好きです。近代的なものとして、非常に面白い。昔のダウンタウンの良さがあります。

**池永**　一方で江戸の頃の風情も残っています。ですが、近畿がこれからどういうふうに生き延びるかという議論をするなかで、強みである歴史・文化を核とした都市魅力戦略の議論にはなかなかならない。

**カー**　とはいえ、大阪は今観光客が増えています。ですから観光産業というのは成長産業になりつつあるとは思います。

## 日本文化を知る日本人との出会い ——「型」に囚われず「実」を学ぶ

**池永**　最近、滋賀県の琵琶湖を訪れる外国人観光客が増えています。湖西は、カーさんとお付き合いがあった司馬遼太郎さんが『街道をゆく』のなかで、日本人の祖形を求めて最初に選んだ地ですが、司馬さんとの話で特に印象に残ったことはありますか。

**カー**　司馬さんが大阪についてしてくれた話が面白かったですね。彼いわく、昔は運河が多かったので橋がたくさんあったが、役所がつくったものは少なくて、大半の橋は町民が自分たちでつくりあげたものだと。江戸時代頃の話ですが、京都も江戸もしっかり取り締まりがあるのに大坂だけノーマンズランドで、結構好き勝手にやっていた。そこから大阪人の自由な発想が生まれて、独特な大阪弁や大阪漫才、それから商売につながっている。下手な規制がなくやってきた人たちだからいきいきとした大阪文化が生まれた。そんな話をしてくれました。

**池永**　ほかにも坂東玉三郎さんや白洲正子さんといった錚々たる文化人の方とも大変親しくお付き合いされていたそうですが、お二方からはいかがですか。

**カー**　玉三郎さんとは凄く若い頃に知り合っています。彼の通訳をしていたこともあったので、一日中楽屋にいることもあり、そばにいるだけで多くのことを学べました。たとえばしぐさやセリフの話し方、言葉を話すときの「間」もそうです。

Alex Kerr


アレックス・カー

1952年米国生まれ。東洋文化研究者、作家。イェール大学日本学部卒業。1977年から京都府亀岡市に居を構え、書や古典演劇、古美術など日本文化の研究に励む。その後、景観と古民家再生のコンサルティングを開始し、長崎県小値賀町、奈良県十津川村など十数軒の古民家を改修。滞在型観光事業を営む。近著に『もうひとつの京都』（世界文化社）がある。




歌舞伎の世界では「間」はとても大切な問題ですから。

**池永**　そこから生活文化そのものも歴史も学べるんですね。歌舞伎はまさに日本の生活文化の宝庫みたいなものですね。

**カー**　玉三郎さんは、古いものを非常に大事にしています。そしてその深いところを追究していきながら、非常に現代的な目で見ていますね。昔のしきたりがこうだったということは一切言わない。そういうものを大事にするのではなく、「しきたりや型の裏に何があったか」ということをいつでも考えている方です。よく私たちにも指導してくれましたが、踊りで東山といったら東山を見ていなければいけないんですね。型で示す東山じゃなくて、山そのものを見なさいと。

**池永**　やはり深く追究すればするほど、表面的なことではなく「実」のところに行きつくんでしょうね。

**カー**　そして面白いことに、古いものの奥にたどり着いた時点で斬新さを見つけるわけですね。

**池永**　伝統を追究すると新しいところに行きつく。

**カー**　そう。だからしきたりや何かに囚われている人たちは新しさもない。

**池永**　表面的な物質的デザインではなくて、その奥にある精神的にデザインされたものを、カーさんが発掘してくれているのではないかと思います。カーさんが古民家でやられていることも同じですよね。白洲正子さんの武相荘（ぶあいそう）もまさに古民家ですが、そのような影響もありますか。

**カー**　子どもの頃は古い家を近代的に直していたのは外国人が多かったですが、でも白洲さんみたいな方も昔からいましたので、そういう本当に美しいものを知った日本人はやっぱりいたんですね。

**池永**　ですから我々はそういう人たちからも学んでいかなければ、本当の日本の良さは見えてこないし、日本のあるべき姿も見えないままになってしまう。

**カー**　そう思いますね。

## 古来あった外の視点 ——今こそ取り入れ、古い考えから卒業を

**池永**　カーさんは東洋文化研究者の顔ももっていらして、最近は東南アジアにもよく行かれているそうですね。著書には歌舞伎の『累（かさね）』になぞらえて、移転を考えながらも結局日本に戻ってきてしまうと書かれていますが。

**カー**　日本から離れて東南アジア、特にタイのあたりをまわっていると、そこから日本が見えてくる部分があるんですね。お寺などは中国や韓国ルートで入ってきていますが、家はあきらかに東南アジアから入ってきています。タイ、インドネシアにある高床式で全部木造の東屋のようなものや草屋根もそうです。もちろん日本だけのものもありますが、日本の礼儀作法も、タイと随分通ずるものがあるんですよ。

**池永**　奈良時代の貴族などの支配者層は40％ぐらいが渡来人だったようですが、平安時代の初期頃まで、渡来人の知識・知恵を活かしながらやっていたという歴史があります。

**カー**　あの頃は凄くインターナショナルでしたね。仏教にしても、日本の仏教からインドネシアのボロブドゥールまで全部ひとつでした。

**池永**　海外の技術・文化が僧侶や渡来人を通じてもたらされ、そこから日本的なものをどんどん生み出していきました。

**カー**　変えていくわけです。

**池永**　そこが日本の良さにつながっている。結局日本人は古くから外の良いことに学び、吸収して、それを良い形で日本の文化として進化させてきたという史実があるわけですから、現代の我々もそれに学ばなければいけませんね。

**カー**　やはり「型」にこだわるのではなく本当に大事な「実」を見極めてほしい。先にも述べたとおり、残念ながら日本はずっと留年が続いていますが、卒業できて初めて古い町の活かし方が考えられますし、成功すれば、新しい町にも良い発想が生まれる。高層ビルや地下鉄のつくり方といった新しいものにも転換できるでしょう。それらはすべてつながっていると思います。日本は資金力や経済力もある、教養もある。そういうものを支える、活性化させる知恵も、力もあるのですから、何百年何千年積み重ねてきた風景、あるいはコミュニティが壊れてしまう前に、なんとかしっかり卒業してもらいたいですね。

Ikenaga Hiroaki


池永　寛明

大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所長。1982年入社後、天然ガス転換部にて人事勤労業務、営業部門にてマーケティング業務に携わる。日本ガス協会企画部長、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年より現職。